

批評・紹介

内藤虎次郎 著

中國中古の文化

昭和二十二年四月、東京、弘文堂刊
A5判、二四七頁、價六〇圓

中國近世史

昭和二十二年五月、東京、弘文堂刊
教養文庫版、一三一頁、價二〇圓

先に發行された「支那上古史」に續いて、本年の四・五月、新たに「中國中古の文化」と「中國近世史」とが相ついで弘文堂から出版された。何れも大正・昭和の交の内藤博士の京都大學に於ける講義を、聽講者のノートを原にして整理したものであつて、三者を合せると、これで大體、博士の中國歴史觀の全貌を窺ふことが出来る。

博士の中國史に對する最大關心事は、時代時代の特徵を把握するにあつた。それには先づ、時代を王朝によつて區分する舊習を打破しなければならぬが、さりとて漫然と手頃な長さに固めて區切るのではなく、又封建時代・郡縣時代といふ風に形式のみに拘はるのでもなく、もつと深く社會狀態を掘り下げて、一見不動に見へる中國社會にも大きな時代の變化のあることを發見し、時代の特徴によつて新たな時代區分を試みられたのであつた。従つてその興味は時勢の變遷といふ點に集中され、

「中古の文化」に於いては、中古期を三國以後と定め乍ら、遠く前漢代から説き起して、漢から六朝への變遷を明かにしやうとし、その爲に分量に於いては反つて漢代の方が多いといふ結果になつてゐる。「近世史」の方も、一番力の籠つてゐる所は、最初の二章、「近世史の意義」と、「貴族政治の崩壊」とのあたりで、唐以前と宋以後とを對比し乍ら、中國社會が新しい時代に移り變つたことを論證してゐる。

原來が講義筆記であつて、時間の制約の爲に、「中古の文化」は貴族政治がやつと成立した所で終り、「近世史」も元末までで明清がなく、尻切れとんぼに終つてゐるのは物足りないが、併しこれで讀者に、中國史の中古と近世との明瞭な概念を與へるには十分であらう。但し近世史については博士晩年にもつと明代史を研究する必要があることを痛感されたらしいが、この書からは明清中國社會の趨勢について一應の見透しなりとも聞くことが出来ないのは残念である。

インキやペンを極端に嫌ひ、いつも毛筆で用を足した博士には、講義の原稿といふものがなく、机の上に山のやうに漢籍をのせ、あちらこちらを参照しながら談話のやうに講義されるのが常であつた。だから全體として見た時、新聞連載の長編小説にあるやうに、旨く纏まる時と、思ふやうに纏らぬ時とがあつたらしい。今兩著を比べて「近世史」の方が遙によく纏つてゐるのは、何回か講義を繰返された最後のものなので、行く先が

はつきり分つてゐた爲であらう。

博士の學風についてはこれまでも本誌上で度々紹介したから重複を避けるが、中古に於ける貴族制と、宋以後の社會の持つ近代性とは、博士の最も得意とする議論である。但し近頃の若い人達には、博士の言葉だけではまだ呑みこめない者もあるであらうが、これは矢張り年代の相違で已むを得ない。何でも西洋の言葉つきで言ひきかせなければ納得出来ない時世になつて來てゐるのだから。

年代の相違は博士の歴史を見る立場についても云へる。それはどこ迄も士大夫的な立場から帝王を傍近くに眺め、大臣宰相を周圍に睨みまわしてゐる點である。この時代の大學の先生は幸福な特權階級であつたから、自づから斯ういふ氣品も産じたのであらうが、其後段々世の中がせち辛くなるにつれ、我身につまされて、食貨志を読み、お蔭で社會經濟史分野の學問が長足の進歩を遂げた。この書にはさういふ問題が殆ど取上げられてゐないから、後生の者はこの方面を裏附けして行く必要があらう。

何れにしても博士の中國史概説は、ごく小數の學生だけで獨占しておくには勿體ないものであつた。この書の内容が講義されてから、今日で最早二十年以上になる。もつと早く博士の學問が廣く公開されてゐたならば、初學者が中國史に對して大體の見當をつける爲にどれだけ無益な時間と努力とを省き得たか

知れない。

概説書といへばすぐ文檢參考書のやうなものと思ひこみ、無味乾燥に書けば書く程科學性があるやうに思ふ人の多い時代に眞の意味の中國史概説書として、この書を一般讀書界に紹介することが出来るやうになつたのは、ひとり筆者の喜びのみではあるまい。

〔宮崎市定〕